

「CP + (シーピープラス) 2024」が開催

神谷 直亮

カメラ映像機器工業会が主催するカメラと写真映像の世界プレミアショー「CP + 2024」が、2月22日から25日までパシフィコ横浜で開催され、展示会場には、キヤノン、ソニー、富士フィルム、ニコン、パナソニック、OM デジタルソリューションズなど91社・団体が出展していた。

「さあレンズを向けよう、二度と来ないこの瞬間に」をキャッチフレーズに掲げた今回の会場では、春らしく華やかに居並ぶ最新のカメラ展示に加えて、キヤノンが「VR (仮想現実)・MR (複合現実)」、カンダオが「VR」、富士フィルムが「Web メタバース」という絶妙なスパイスを提供していたのが印象的であった。

キヤノンは今回、同社の「MREAL」ヘッドセットを駆使するMRの体験デモに加えて、メタ社の「Meta Quest 3」と中国の「PIMAX」ヘッドセットを使用するVRのデモを行ってブースを盛り上げていた。

「MREAL」のコーナーでは、キヤノンが独自に開発した複合現実体験用の「MREAL X1」ヘッドセットを装着して「新日本フィルハーモニー交響楽団が演奏する「ボレロの5分間バージョン」を楽しむことができた。説明員は、「仮想空間のデジタル立体イメージを現実世界に違和感なく融合して、自由な視点で体験できるのが特色」と語っ

ていた。また、「MREAL X1」については、「旧モデルMREAL S1の約2.5倍の大画面サイズが実現できている」と説明していた。

「Meta Quest 3」のコーナーでは、ゴスペラーズのすばらしい映像と歌声を体験できた。VR映像の撮影には、「EOS R5C」カメラに「RF5.2mm F2.8 L Dual Fisheye」レンズを組み込んだものを使用したという。ブースの担当者は、「EOS R5C」の他にも対応する「EOS R5」「EOS R6 Mark II」に装着することで「180度3D VR映像を撮影できる」と語っていた。「PIMAX」のコーナーでは、11月3日から5日まで福岡県宗像市で開催された「宗像フェス2023」で歌いまくる「ぼってん少女隊」6人の躍動にあふれた歌と踊りを「PIMAX Crystal 4K UHD VR」ヘッドセットを装着して体験できた。Pixel数を聞いてみたら「Horizontalが5760、Verticalが2880で、業界最高のレベルを有する」との回答であった。

中国を本拠とするカンダオ社は、「VR Cam」「QooCam3」「QooCam 3 Ultra」「Obsidian Pro」などの製品でブースを飾り売込みに余念がなかった。「VR Cam」は、8Kの3D映像出力を実現する高画質VR180ライブ配信カメラである。カメラには、4/3インチセンサー、F2.8レンズ

がそれぞれ2個搭載されている。ブースでは、「ライブ配信用のソフトウェアKandao Streamと組み合わせて使用することにより、安定した高品質な配信を実現する」と説明していた。1/1.55インチセンサーとF1.6レンズを搭載した「QooCam3」は、5.7K 30fpsの360度パノラマ動画、6,200万画素の360度パノラマ写真の撮影を実現する。上位機種「QooCam 3 Ultra」については、「8K 30fps、5.7K 60fps、4K 120fps 360度動画撮影というオプションで、クリエイターの映像表現力を満たす」と強調していた。「Obsidian Pro」は、12K x 12Kのシネマティック3D VRカメラである。8つのAPS-Cセンサー、F2.8の広角レンズを搭載しており、8K 30fpsのライブ配信ができるのが特色と言える。

富士フィルムは、写真愛好家向けのWebメタバース「House of Photography in Metaverse」を披露した。ショールーム、ギャラリー、コミュニティエリアなど5つの空間で構成され、ユーザーがアバターになって必要な製品情報を得たり、ユーザー同士で交流を楽しんだりするのが特色だ。

一方、定番のカメラについては、ソニーが「α9Ⅲ」、ニコンが「Z9」「Z8」、パナソニックが「G100D」、キヤノンがEOS Rシステムシリーズの「R5C」「R5C70」を目玉にして出展した。

ソニーの「α9Ⅲ」の最大の特徴は、世界初のグローバルシャッターを搭載したフルサイズミラーレスカメラに仕上がっている。また、高速性能に優れており、「120コマ/秒の高速連写を実現する」と語っていた。

同社のブースには、シネマラインカメラの「BURANO」「FX6」も目を引いた。「BURANO」については、「35mmフル



写真1 キヤノンの「MREAL」のコーナーでは、「MREAL X1」ヘッドセットを装着して「新日本フィルハーモニー交響楽団が演奏する「ボレロの5分間バージョン」を楽しむことができた。



写真2 キヤノンの「PIMAX」のコーナーでは、「ぼってん少女隊」の躍動にあふれた歌と踊りを「PIMAX Crystal 4K UHD VR」ヘッドセットを装着して体験できた。

フレームイメージセンサーによる・高品位な映像制作 (8.6K 30fps、6K 60fps、4K 120fps) が可能なうえに、かつてない機動性をもたらすシネマカメラ」と語っていた。また「FX6」に関しては、「4K 120fps、2K240fps」の撮影を実現するという。

ニコンの「Z9」は、「世界最多9種類の被写体を検出する高性能AF」「すべての瞬間を見逃さないReal-Live Viewfinder」「8K UHD 30p 10bit 動画の2時間収録」「縦横4軸チルト式画像モニター」を誇る。「Z8」については、「Z9から体積比で約30%小型化したコンパクトなボディの製品ではあるが、Z9の優れた性能と機能をバランスよく凝縮したバージョンになっている」と説明していた。

なお、2月7日にニコンが「国際宇宙ステーション (ISS) で使用されるフルサイズ/FX フォーマットミラーレスカメラ Z9 を米航空宇宙局 (NASA) に納入した」との発表を行っており確認したところ、「このニコン Z シリーズのフラグシップモデルは、1月に SpaceX 社のファルコン 9 ロケットで ISS に送られた。宇宙飛行士により使用される初のミラーレスカメラになった」と誇らしそうに語っていた。

なお、調べてみたらニコンと NASA は 1970 年代から長い関係を維持していることが分かった。まず、1971 年にニコンは、アポロ 15 号のために NASA 仕様の「ニコンフォトミック FTN」を開発し提供している。次いで、1999 年にはフィルム一眼レフカメラ「ニコン F5」、2008 年にはデジタル一眼レフカメラ「ニコン D2XS」、2013 年にはデジタル一眼レフカメラ「ニコン D4」を ISS に届けている。さらに 2017 年から「ニコン F5」が、2020 年から「ニコン D6」が使用されるようになり、今年から上述したように「ニコン Z9」が加わることになった。

パナソニックは、「ココロ動かす、いい写

真」を旗印に掲げて「Lumix G 100D」を売り込んでいた。高画質 2030 万画素の Live MOS センサーと高性能 ヴィーナエンジンを搭載しており「目に見たものに忠実な色味」「中間トーンの色調再現」「346g の軽量ボディ」の3点が特色と強調していた。

キヤノンは、EOS R システムシリーズの「R5 C」「R5 C70」を前面に押し出していた。「EOS R5 C」は、「EOS R5」と同等のスチールカメラと 8K CINEMA カメラのハイブリッド型で、スイッチレバーで切り換えが可能になっているのが特色だ。静止画の性能は、高速・高画質な約 4500 万画素を誇る。「R5 C70」については、「R5 C が 8K まで撮影ができるのに対して R5 C70 は 4K までではあるが、ビデオの撮影用にはこちらの方が向いているのでお勧め」と語っていた。

上述した 4 社に加えて、富士フィルムの「Instax チェキ」、2021 年にオリンパスの映像事業部門を買収した OM デジタルソリューションズ社の「Tough TG-7」が目についた。

手のひらサイズカメラに特化した「Instax チェキ」には、「mini Evo」「mini Liplay」「SQUARE link」「Link Wide」「ハイブリッド」など多種多様なモデルがあり見てあきない。また、ラベンダーブルー、ピスタチオグリーン、ミルクイーホワイトなど、非常にカラフルに仕上がっている。

「人生にワクワクを、Tough に冒険を」を謳った「TG-7」カメラは、「顕微鏡モード」「水中モード」「深度合成モード」などを駆使して驚きの撮影ができる。タフ性能のついでに、「水深 15m の防水、2.1m の



写真3 カンダオ社の「QooCam 3 Ultra」カメラは、超小型ながらも 8K 30fps、5.7K 60fps、4K 120fps 360度の動画撮影ができる優れものである。

耐衝撃性、100kgf の耐荷重、耐結露、防塵などを具体的に挙げていた。

変わったところでは、インスタ 360 社がアクションカム、サイトロンジャパンがスマート天体観測ステーションを紹介していた。

中国オリジンのインスタ 360 社は、最新の軽量ポータブルカメラ「GO 3」を目玉にして出展した。ブースの説明員は、「アクション撮影に最適なカメラである。特有の FlowState 補正機能により手振れ、揺れ、回転を除去でき、安定した映像を撮ることができる。独創的なアングルを実現する磁気マウントシステムもある」と語っていた。価格を聞いてみたら「約 6 万円」との回答であった。同社は、この他に VR 撮影用の「TITAN」と「Pro2」カメラも紹介して注目を集めていた。

サイトロンジャパン社は、スマート天体観測ステーション「VESPERA II」を出展した。ブースの担当者は、「4K UHD 対応で、ソニー製 IMX585 カラー CMOS センサー - (3840 x 2160) を搭載しており、肉眼では見えない銀河、星雲、星団などのディープスカイオブジェクトの観測に向いている」と語っていた。

Naokira Kamiya
衛星システム総研 代表
日本衛星ビジネス協会 理事